2014. 8. 15

No.184

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

アウシュヴィッツとプラハを訪ねて ー神美知宏さん追悼の旅

参加者：浅川身奈栄　井上昌和　黒尾和久　佐々木明員　（4人の敬称略）　樋口みな子（記録）

撮影：黒尾和久さん　アウシュヴィッツ収容所の門「ARBEIT MACHT FREI」（労働は自由への道）とあります。

国の隔離政策で差別と偏見に苦しめられたハンセン病元患者の人権回復に奮闘された神美知宏さん（全国ハンセン病療養所入所者協議会長）が5月に80歳で亡くなりました。今回の旅にはご一緒する予定でした。私も一昨年の入所者の待遇改善を求める集会や1月には札幌でお目にかかったばかりでした。（右上写真は神さんの遺影）

当初は9人でアウシュヴィッツ等の訪問を予定していましたが、神さんが亡くなったことなどの事情でメンバーは5人。7月14日、ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会のメンバーに国立ハンセン病資料館の学芸員も、東京から仁川空港（韓国）で合流しました。4回の乗り継ぎでようやくポーランドのクラクフに着いたのは15日の夕方でした。

写真：逃がさない！有刺鉄線が冷酷に待ち構えます。

7月16日、早朝にホテルを出発。バスターミナルでオシフィエンチム（アウシュヴィッツに向けて出発。北海道に良く似た田園風景の中を西に走り1時間40分でアウシュヴィッツ博物館に着きました。

すでにAさんが早くに予約していた日本人ただ一人の公式ガイドの中谷剛さんに案内していただきました。中谷さんの著書「アウシュヴィッツ博物館案内」や「ホロコーストを次世代に伝える」を事前に読んの参加です。

中谷さんは強制収容所がなぜポーランドにあるのか？という参加者から多く寄せられる疑問から説明されました。当初の開設目的は、ポーランド人政治犯や抵抗組織のメンバーを拘束することだったこと。知識人、芸術家、キリスト教神父など社会的なリーダーも含まれました。ポーランドは戦時中、ナチス・ドイツの占領下にありました。アウシュヴィッツには130万人の人々が強制収容されたのです。その75～80％の人がガス室で殺されました。ユダヤ民（中谷さんはこう表現されます）は110万人。ポーランド人は14～15万人、そしてロマ（ジプシー）2万3千人、精神・障がい者や同性愛者なども絶滅の対象にされたと続けました。ユダヤ民への差別だけでなく、放浪の民とされるロマも異端とされたのです。p2に続く）

4～10月はガイド付きでのみ見学可

収容者が到着するとすぐ、ドイツ軍医が顔色を見て働けるかどうかを判定する「選別」が行われました。働けないと判断された人はそのままガス室に送られました。親衛隊によって大勢の収容者を並ばせている写真から、突然人生を奪われた人々の絶望感が伝わってきて、胸が締め付けられました。

ナチスは、連行された人たちの鞄に「後でわかるように」と名前、住所などを書かせました。（写真左）しかし持ち主が再び手にすることはありませんでした。没収した鞄、靴、食器、義足の山がガラスケースに保存されています。

特に虐殺されたユダヤ民の「生の証」である靴は

かったでしょうか。博物館の職員による「ナチス・ドイツが行ったユダヤ民らへの大量虐殺の事実を忘れてはならない」と丁寧に保存されていることにも敬意を表したいと思います。職員らの幼子を愛おしむ気持ちが伝わってきました。

ガス室に用いられたのはチクロンＢです。ガス室の屋根からこの缶が投げ込まれました。チクロンＢは殺虫剤で5キロで1000人以上の殺害能力があったと言われます。（写真・下段中央）ガス室には一

時にも、慰霊のお花が供えられていて、手を合わせる人が多くみられました。

中谷さんの著書には、特別労務班員のことについても書かれています。大量の殺人行為の大部分の作業はユダヤ民収容者に行わせたのです。強制収容所の管理。運営主体だった親衛隊が「役に立ちそうな」収容者を集めて、今を生きるための条件と引き換えに作業を命じたのです。彼らは特別労務班員と呼ばれ命の保証を得たわけではなかったといいます。「アウシュヴィッツ博物館案内」には、かろうじて生き延びた特別労務班員の話を中谷さんが聞き取った貴重な証言があります。何十年も語ることができなかった証言は、単純に悪と断ずることが出来ない心の闇をかいま見る思いがします。

脱走の罪の身替わりで餓死刑にされたコルベ神父

履きこまれていて、一人ひとりの人生を想像すると、あまりの理不尽さに言葉を失いました。（写真右）また、大量の髪の毛が、収容者の多さを物語っていました。（写真は禁止）髪の毛は織物、靴下などに加工されたのです。髪をとても大事にしていたアンネ・フランクを思い出しました。いつも巻き毛にしていた愛らしいアンネの叫び声が聞こえてくるようでした。

とても大事に育てられていたのではと想像できる子ども服の前で私は足が止まりました。（写真下段左）子どもは役に立たないと即座にガス室に送られたことを思い、母たちはどれほど辛く悲し

度に数百人もの人たちが詰め込まれ、死体からは金歯やイヤリング、指輪などの貴重品が抜き取られたのです。人間としての感情が全く麻痺していたとしか思えません。

アウシュビッツはガス室だけでなく、さまざまな死の道がありました。独房で餓死した人、蚕棚の上でチフスに倒れた人、人体実験で殺された人等。ポーランド抵抗活動家は「死の壁」で銃殺刑に処されたのです。（下段右）私たちが見学した

の小さな独房も見ました。戦後、アウシュヴィッツが閉鎖されて生き延びたポーランド人は90歳まで生き、生涯コルペ神父の恩を忘れることはなかったそうです。コルベ神父は生前「聖母の祝日に灰になり、後に何も残らないよう風に運ばれて世界の隅々にまで散りたい」と語っていたということです。

コルベ神父の命日の平和記念式典では、もう二度とアウシュヴィッツが象徴するような暴力や迫害が起こらないように、暴力が消えた世界が愛で満ちるように、祈りが捧げられるそうです。

中谷さん（写真上段中央）の説明がとても丁寧で詳細で理解が深まりました。次ページ、少し離れたビルケナウ収容所の概要を伝えます。

ビルケナウ アウシュヴィッツ第二収容所

アウシュヴィッツ第一収容所から3km離れたビルケナウを見ました。

ビルケナウ収容所は、収容者の殺害能力を拡大するために建設され、しかもすべての労働力を収容者でまかないました。ブジェジンカ（ビルケナウ）住民をを強制退去させて新しく作ったのがビルケナウ収容所です。ほとんどが木造でアウシュヴィッツよりかなり粗末な建物です。

世界中から集められたユダヤ民は粗末な貨物列車にぎゅうぎゅう詰めに押し込まれ、ビルケナウに連行されたのです。そこでは「死の門」が待ち構えていました。（写真下左）引き込み線を入るとナチスによって働ける人と、そうでない人の選別が行われました。中央写真は今も残る貨物列車です。「アンネの日記」を書いたアンネ・フランク一家も収容されました。1944年9月です。2ヶ月の収容後、アンネはベルゲンーベルゼン収容所で翌年の2月頃チフスで亡くなりました。

ビルケナウでのアンネの様子を生き延びることが出来た女性の証言があります。「アンネは姉と一緒でしたが、着たきりでシラミ、ノミ、ダニ、南京虫が襲い掛かる劣悪な環境で体中が疥癬で赤く腫れていた」と。この粗末な三段ベッド（写真上段右）をアンネも使ったのでしょうか？「アンネの日記」との出会いは別の紙面に。「夜と霧」でヴィクトール・E．フランクルが「むき出しの板敷きに九人が横になった。横向きにびっしりと体を押しつけあって寝ければならなかった」と書いています。一段に3～4人が詰め込まれ、一棟で400人が収容されたようです。

囲いもなく、紙もない、水もない、人間としての尊厳を全く無視された女性用のトイレ（写真左下）はショックでした。現在でも残っている収容棟は自由に見ることができます。

私たちは広大な収容所群を歩きましたが、写真で知る厳寒のビルケナウは北海道の原野と似ているように思えました。

写真中央は残された焼却炉です。写真右上は破壊されたクレマトリウム（ガス室・焼却炉）です。戦況が悪くなると、ナチス・ドイツは証拠隠滅のために爆破しました。アウシュヴィツで110万～160万人が殺されたのです。残骸から脱衣場とガス室が地下構造になっていたことがわかったと中谷さんの本で書かれています。

中谷さんは著書「アウシュヴィッツ博物館案内」で「過去の歴史を語り継ぎながら、そのプロセスを通じて、戦争を体験していない様々な国や民族の若者同士がお互いの思考様式や価値観の違いを確認する大切さを感じる。私たち日本人もドイツ人のように、隣人の歴史を理解し、認識を共有できるような関係を築きたいものだ」と述べています。

1945年までの日本はナチス・ドイツと同盟関係にあったことも忘れてはならないことです。アウシュヴィッツで起こったことは日本と無縁ではないことを知って欲しいです。

アウシュヴィッツ博物館には年間130万人もの人たちが訪れていますがアジアでは韓国が一番多く昨年度は45000人、日本人は15700人だったといいます。特に若い世代が少ないと中谷さんは話されました。

この日も世界中から見学に来ていて朝早くから長蛇の列が出来ていました。私たちは幸い3ヶ月前に予約していましたので、十分な説明を受けることが出来ました。

パレスチナの地にイスラエルが建国されたことで、70万人が難民になり、双方の憎しみの連鎖で、殺し合いが続いています。どんな理由があろうと、無抵抗の女性や子どもを巻き込むのは間違っています。平和のための戦争なんて絶対にないのです。宗教や文化、民族の違いをお互いに認め合い、仲良くでできるように話し合い、理解することが平和への道ではないでしょうか？

駆け足で伝えられることも限りがありますが、人種差別や偏見のない、平和こそ宝と伝えたいです。

シンドラーの工場（クラクフ）とテレジンゲットー（プラハ）

参考図書：「アウシュヴィッツ博物館案内」中谷剛　「ホロコーストを次世代に伝える」中谷剛　「夜と霧」ヴィクトール・E・フランクル
「アンネの日記」増補新訂版　アンネ・フランク　「アンネ・フランクその15年の生涯」黒川万千代　「アンネ・フランクの記憶」小川洋子

７月18日、私たちはクラクフ駅からトラム（写真・左下）に乗り、映画「シンドラーのリスト」で有名なシンドラーの工場を訪ねました。

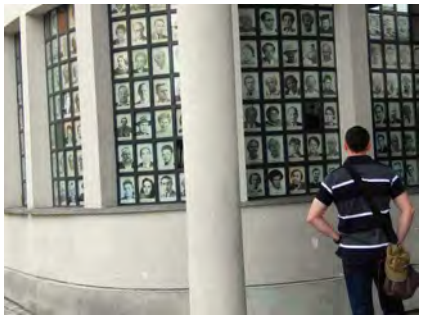
現在はホーロー工場跡がクラクフ歴史博物館になっています。クラクフ市街は中世の雰囲気が漂っていますが、ここは労働者の街です。やはりここは、シンドラーの工場と言ったほうが分かりやすいですね。

入り口横の窓にはシンドラーに救われたれた人々の写真（中央）が飾られています。その数1100人。

映画は収容所でのユダヤ人迫害(虐殺)がいかに酷かったかをつぶさに描いていましたが、ドイツ人のシンドラーは、ユダヤ民を工場の労働者として雇用しました。

見学コースは工場の様子やシンドラーの執務室（写真・右下）の再現、クラクフ旧市街やゲットーの様子、そこで暮らす人々の写真、映像などが展示され当時の状況を伝えています。ただ、狭い階段で右に行ったり、左に行ったりと入り組んでいて、迷子になりそうでした。

日本人ではリトアニアのカウナス領事館に赴任していた杉原千畝さんがナチス・ドイツの迫害によりポーランド等欧州各地から逃れてきたユダヤ民に、大量のビザ（通過査証）を発給し、およそ6000人を救ったことで有名です。良心に従った行為も、密告などで命を失う人もいた時代、二人の勇気ある行動に敬意を表したいと思います。



７月21日、私たちはプラハから北へ60キロほど離れた小さな町テレジンに向かいました。途中ヒマワリの群落（写真・下左）に目を奪われました。

ほぼ1時間で着いて、美しいポプラ並木を少し歩くと整備されたユダヤ民の墓地（写真・下左から2番目）がありました。きれいに清掃され、お花が植えられていてホッとしました。

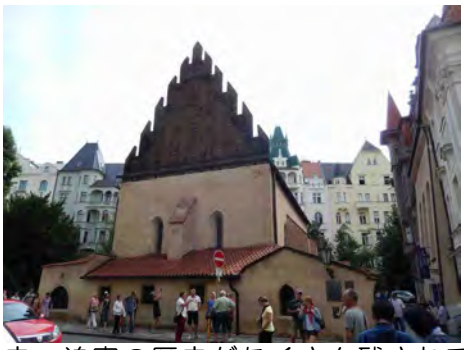
テレジンは18世紀、プロシアからボヘミアを守るために作られたという要塞の中にある街です。形が函館の五稜郭に似ています。テレジンには川をはさんで大要塞と小要塞があります。

本来はボヘミアとモラビアのユダヤ人の一時収容施設となるはずが、ナチス・ドイツ占領下の他の国々からの囚人用ー老人ゲットーとなりました。当時３つの機能を果しました。まず通過目的、選別殺人（囚人の４分の１がここで死亡）、そして有名な宣伝目的です。ナチスがテレジンにおいて「美化キャンペーン」と称するプロパガンダにより「ユダヤ人自治移住の地」という偽りの姿は、他国に対してテレジンの囚人の悲劇、「ユダヤ人問題の最終的解決」の真の姿を、覆い隠すベールとなるべきものでした。（資料館のパンフレット解説から）

テレジンに送られてきたユダヤ人は、およそ14万4000人。その4分の1近い3万3000人が病気、飢え、過労、そしてナチス・ドイツによる暴行や拷問や刑罰でテレジンで亡くなり、8万8000人がアウシュヴィッツなどの絶滅収容所に送られ、そこのガス室で殺されました。ここにも「労働は自由への道」（写真・下右から２番目）の門がありました。生き残れた人は4000人に満たなかったとあります。

ドイツ降伏の1945年5月8日、テレジン収容所には4000枚の絵と30篇の詩が残されていました。（写真・右下）ゲットーには音楽や美術の教師、医師らの命をかけた大人たちによって、子どもたちは「人間らしく生きる」ことができたのです。最初の頃の絵は暗く、未来のない絶望を嘆くもので、当時の生活が偲ばれ胸に迫ります。でもだんだん夢のある絵に変わっていきます。教師らは、子どもたちに抵抗や生き残る望みも与える献身的な努力を重ねたそうです。人種差別の犠牲になった子どもたちに、「こんなことは二度としませんから」と思わず心の中で誓いました。

プラハのユダヤ人地区



７月22日、旅の最後の日、私たちはプラハ旧市街広場の聖ミクラーシュ教会周辺を歩いてユダヤ人地区を見学しました。

シナゴーグにはユダヤ教の歴史、迫害の歴史がたくさん残されています。私も初めて知ることばかりでした。シナゴーグとはユダヤ教の会堂のことで、俗にユダヤ教会と呼ばれています。旧新シナゴーグ（写真上）は、現在も使用されているシナゴークの中でヨーロッパ最古のものといわれています。1270年代に建てられ、特殊なゴシック式建築としても名高く、ぎざぎざの屋根が印象的です。

ピンカスシナゴーグは、プラハで2番目に古いシナゴーグです。（写真右）15世紀後半ラビのピンカスによって建てられた教会で、内部の壁には、ナチスによって殺害された8万人の名前と死亡年月日がびっしりと刻まれています。

またテレジン収容所で子どもたちが描いた絵も展示されていました。ユダヤの生活習慣についての展示もあり、独特の文化を知ることができました。

クラウゼンンシナゴーグ（写真左）はユダヤ人地区（ゲットー）で最大のシナゴーグです。埋葬組織の拠点としての役割を果たしました。館内では祈りや断食などのユダヤの宗教儀礼についての解説と展示をしていますが、ガイドなしなので、理解はできませんでした。

ピンカスシナゴーグを出るとすぐに旧ユダヤ人墓地への入り口に続きます。狭い墓地内にはおおよそ1万2000基もの墓石があるといわれていますが、墓石の下にも幾重にも埋葬されているそうです。（写真右）限られたスペースに無理やり埋葬されたため、墓石が9つも10も重なっている箇所や、支えあっている墓石、倒れてしまったものなど、周りは暗くて何百年ものさまざまな思いが漂っているようでした。土から作られた人造人間「ゴーレム」を操ったとされる有名なユダヤ教の司祭、ラビ･レーヴのお墓もここにおさめられています。

ここで使うゲットーとはユダヤ教徒が住むことを許された一定の地区のことです。

ユダヤ人地区を歩いて、何世紀にもわたってユダヤ民が迫害されてきた歴史をかい間見ることができました。ここでは、ドイツ占領下の各国からユダヤ民が駆り集められ、さらに強制収容所に送られました。この地区で、戦後まで生き残れたのは2500人にすぎなかったといわれています。

アンネと出会う旅

私がアンネ・フランクの「アンネの日記」を読んだのは中学2年の時です。私は他の街から転校したばかりで、友人もいなくて本ばかり読んでいた頃でした。

アンネはアムステルダムの隠れ家で、家族や同居人を鋭い観察眼で表現しました。でもユーモアもあり、不自由な生活の中でもしっかりと世の中を見ていました。快活で誰にでも愛されたアンネですが、いっぽうで、誰にもわかってもらえない繊細な気持ちを持っていて、そこに共感したのかも知れません。クラスメートに「この本読んでみて」と次々と貸した日を思い出します。

なぜ、アンネが迫害に遇わねばならなかったのだろう？いつかアウシュヴィッツに行って確かめたい、と思っていたのが今回の旅につながりました。

アンネは、作家かジャーナリストになりたいと日記に記しました。小川洋子さんは、「アンネの日記」を何度も読み、作家になった原点と著書やさまざまな場で語っていますが、私も高校時代、新聞局に入ったのは「アンネの日記」の影響だったし、「銀河通信」もアンネの社会に開かれた鋭い批判精神に少しでも近づきたいと思ったからでした。

1944年4月5日の日記に「私の望みは死んでからもなお生き続けること！」と書きました。同年5月3日の日記には「いったい全体、戦争がなにになるのだろう。なぜ人間はお互い仲良く暮らせないのだろう。なんのためにこれだけの破壊がつづけられるのだろう。（略）私は思うのですが戦争の責任は、偉い人たちや政治家、資本家だけにあるのではありません。そうなんです。責任は名もない一般の人たちにもあるのです」。と書きました。

鋭い洞察力にアンネが今を生きていたら、世界中で起こっている戦争をどんなに悲しむだろうかと思わずにはいられません。

7.22旅の終点カレル橋で

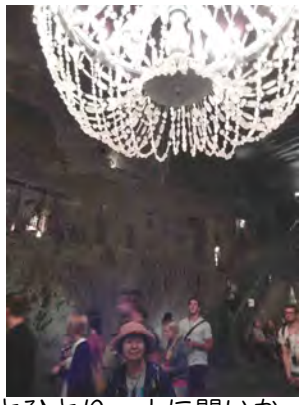
中世の雰囲気を満喫しました

古都クラクフ

ポーランドは、第二次世界大戦の時、ソ連とドイツに挟まれて大変な苦難を強いられた国です。

地下組織での抵抗活動はワイダ監督の「地下水道」で描かれていましたが、ソ連占領下の住民も収容所に送られたり、虐殺されたりして、多くの人命が失われました。4000名を越えるポーランド軍将校がカティンの森で殺害された事件は、長い間、国民には隠されていたことを私は映画で知りました。1989年には憲法が改正されて共産党の国家における指導的役割が崩壊。市民は自由を勝ちとり、国名はポーランド人民共和国からポーランド共和国へと変更されました。

またポーランドはユダヤ民が多く住んでいたため、アウシュヴィッツも含め、600万人のポーランド人が殺されました。このことは、今回の旅で初めて知ったことです。大きな戦争被害を受けたポーランドの人々。中谷さんは、「ポーランド人はいくどとなく選択を迫られてきた。生死をかけた良心の選択である」と書いています。



人間としての強さと弱さを何度試されたのだろう？と想像すると、日本人も、もっと真剣に「戦争する国にしていいのか」とひとり一人に問いかけられているように思いました。

7月17日、ポーランド人の日本語が上手なロキミさんの案内で午前中はヴィエリチカ岩塩坑を見学しました。クラクフから南東約15ｋｍの所にある、ヴィエリチカにあります。

ここの岩塩坑は世界最古の塩の採掘場です。地下101メートルには祭壇や彫像がすべて岩塩でできている聖キンガ礼拝堂など、非常に神秘的な作品を見ることが出来ました。一番の見所である聖キンガ礼拝堂は階段から足もとのタイル、シャンデリア、中央の祭壇から周囲の壁の彫刻まで、すべて岩塩で作られていてとても神秘的で、その技術力と芸術性に圧倒されました。「最後の晩餐」のレリーフも見ごたえがありました。（写真中央と下）

緑色の美しい塩湖や製塩の歴史博物館なども見ごたえがありました。

午後からはヴァヴェル城。クラクフがポーランド王国の首都だった頃の歴代の王が居住していた城です。写真上はクラクフ大聖堂の塔。塔の中に大きな鐘楼がいくつも入っています。

中央広場に面する聖マリア教会（写真左）は1222年にできたゴシック様式の建造物です。１時間おきに塔の上からラッパが吹き鳴らされるのでも有名です。残念ながら、時間がなくて中には入ることが出来ませんでした。私たちのグループでは、翌日の早朝散歩で教会の中に入ってゆっくり鑑賞した人もいます。

プラハに比べると地味ですが、中世の建造物が懐かしいような、不思議な安らぎを覚えました。マリア教会という名前も素敵で、クラクフで一番気に入った建物でした。

日が長いので、テラスでビールや軽食を楽しむ観光客がいっぱい。街頭では演奏なども行われて、とても賑やかです。日本語を学んだ、ポーランド人ガイドのロキミさんは知的な方でした。（写真上の右端）

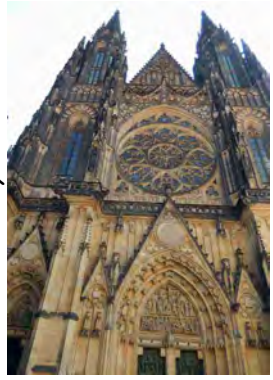
あちこちに話題が飛びますが、ポーランドは地動説を唱えたコペルニクスや、名曲を数々生んだショパン、そしてラジウムなどを発見した功績でノーベル賞を２度（物理学賞と化学賞）受賞したキュリー夫人を生んだ国でも知られます。

17日の夜は教会で開かれたコンサートに出かけました。観客がたった10人というのはちょっと寂しかったですが、親しみのある曲で楽しめました。

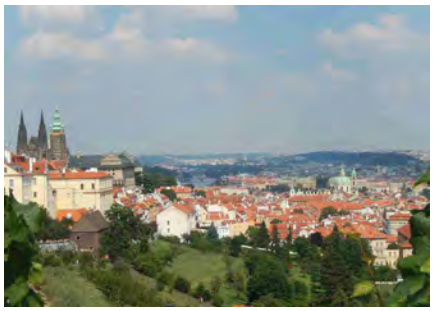
7月18日、プラハへの移動日。午前中、円形の要塞、バルバカン（写真・左）とユダヤ人街を見て、クラクフを後にしました。

城と教会の街プラハ

7月18日、今回の最大の目的であった、負の記憶遺産アウシュヴィッツの見学を終えて少し気が緩んだのでしょうか？プラハへの移動日、クラクフからウィーンに飛び、そこからプラハに向かう飛行機に乗りそびれたのです。プラハには夕方には着く予定でしたが、翌朝まで飛ぶ便はないというし、プラハ行の高速バスは予約で満杯。Ａさんは、懸命に、搭乗口で待っていたこと、案内放送がなかったことなど伝え、なんとかプラハまで行けないかと交渉しました。でも時間は刻々と過ぎて行くばかり。「高速で5時間。今からなら午前0時には着く」とタクシーで向かうことにしました。プラハのホテルに到着した時は心からホッとしました。

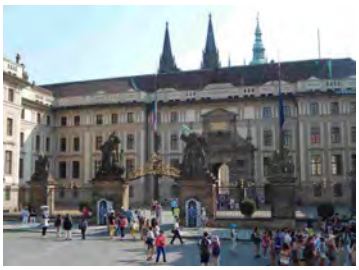


7月19日、プラハに住む日本人ガイドが、ホテルに来てくださり8人乗りの運転手つきの立派なタクシーで出発。澤畑さんのガイドはチェコの見どころを私たちの要望に合わせて案内。説明も知りたいことを的確に答えて下さり、歴史的建造物の理解が深まりました。



（写真上）は聖ヴィート大聖堂です。600年を要したゴシック様式の建築です。

（写真左上）は、ストラホフ修道院のテラスから見たプラハ城です。



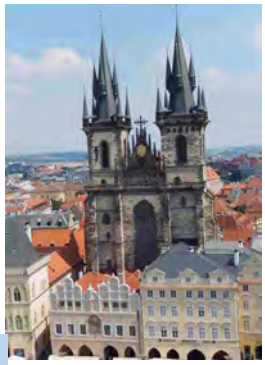
（写真右）はプラハ城の正門です。門を飾っているのは「戦う巨人たち」です。城の衛兵が直立不動の姿勢で見学者を迎え、中世に迷い込んだかのようでした。

聖ヴィート大聖堂のステンドグラスが芸術的で素晴らしかったです。ミュシャは独特の感性で花や女性を描いたポスター画が有名でパリで活躍しましたが、チェコへ帰ってきて制作したのがステンドグラス（写真左）です。

旅の最終日、ミュシャの大作「スラブ叙事詩」を観ました。この地域に伝わる神話や歴史的事件をモチーフにした大作でした。

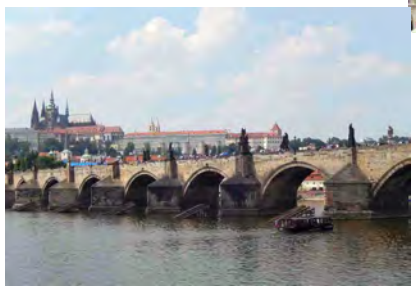
ストラホフ修道院の図書館（写真左）です。天井はだまし絵の手法で描かれたフレスコ画だそうです。中には入れませんが、天井まで届く本を手に取って眺めてみたいなと思いました。17～18世紀のバロック様式の図書館です。

旧市庁舎塔の下の南端にあるのが天文時計（右写真）です。ふたつの文字盤が並んで天体の動きと時間を表しています。上が太陽と月の天地の動き。下が農村の四季の作業を描いています。星好きの夫が見たらとても面白がったと思います。早速、お土産に天文時計を買いました。上手く動いていますが、かけるひももついていなくて、サービスに関しては日本のほうが親切だと思いました。



旧市街広場の東に立つのがティーン教会（写真右）。2本の尖塔が印象的でなゴシック様式です。

プラハの街は数百年も隔てた建築物が何の違和感もなく調和していて素敵でした。



モルダウ川とカレル橋をチェコ城が見つめます。神さんの遺骨をクラクフの公園とモルダウ川に流しました。神さんは最期までハンセン病への偏見と闘い、人権回復と、療養所の待遇改善に力を尽くされました。スメタナの「わが祖国」を天国から聴いていらっしゃるでしょうか？

「プラハの春」の舞台になったヴァーツラフ広場です。（写真下）1989年11月、延べ100万人とも言われるプラハ市民がこの広場に集い、共産党政権を崩壊させ、新政権の樹立を成し遂げました。ビロード革命です。ヴァーツラフ広場はチェコの民主化を象徴する広場なのです。勇気をもらったので加えた一枚です。

最も美しい世界遺産の街
チェスキー・クルムロフ

7月20日、ガイドの澤畑さんの案内で南ボヘミヤのチェスキー・クルムロフを歩きました。

ボヘミアの森とモルダウ川に抱かれた美しい街がそのまま残っています。中世ルネッサンス期の雰囲気がとても素敵でした。（写真上）チェスキー・クルムロフ城をバックにした風景です。

素朴な風合いの織物やチェコガラスなどの小さなお店が並び、私もハンチングを買いました。

プラハの街角では路上ライブがあり、ここでも二人のフォーク調のギターが森と川の街の雰囲気とマッチしていました。

石畳の小道を、ヒールのある靴で歩く女性が多いのにびっくりしました。（写真左）プラハもクラクフもそれは変わりません。私は早歩きは得意ですが、プラハで一日中歩き回った時は、ふくらはぎが痛くなりました。

フルボカー城は、南ボヘミア地方のチェスケー・ブディェヨヴィツェ近郊にあるチェコで最も美しいといわれるお城です。お城の周りには、美しいイギリス庭園が広がっていました。内部の装飾も贅をつくしたもので、どこの国にもお金持ちはいるものだと感心しました。

プラハに戻ると、赤いレトロなトラムが市内を走っていました。夏の土日だけの観光トラムです。とても街に似合っています。また来る機会があったら、是非乗ってみたいです。

チェコのビールは世界一美味しいと評判です。ジョッキ１杯が300円位。安くて美味しいので、プラハでは毎日飲みましたよ。

戦後69年　歴史を忘れないで

アウシュヴィッツで200人近くもいらっしゃる公式ガイドの人々が「人類史上最大の虐殺行為を忘れてはならない」と事実を伝え続けていることに感銘を受けました。宗教や民族の違いで、差別したり偏見を持ったりするのは公平ではありません。ヘイトスピーチも差別意識から起きるのだと思います。

中谷さんの詳細な説明を受けて、犠牲になった人々に思いを寄せて考え続けることが大事だと思いました。それが平和への一歩だと心に刻んで帰ってきました。

日本は被爆国であると同時に、加害者としてアジア諸国の市民を巻き込んだ歴史を忘れてはならないと思います。

第二次世界大戦で、日本軍は２０００万人のアジアの人々の命を奪いました。また従軍慰安婦にされた朝鮮半島の女性たちにきちんと謝罪していません。

戦後69年、それらの加害の歴史を記憶して被害国に謝罪すべきだと思います。私は戦争を知らない世代ですが、ひとり一人の命が大事にされる世の中であってほしいです。

我が国は集団的自衛権の行使容認で「戦争する国」にしようとしています。それぞれができる行使反対の意思表示をしませんか？

ポーランドもチェコも戦争ではずいぶしん苦しめられました。市民が立ち上がり抵抗した歴史を知り、平和を守りぬくことの尊さを学びました。

写真右はプラハの街の壁に描かれた、ジョン・・レノンです。イマジンは「想像してみよう、国なんてないと　殺すことも誰かに殺されることもない　宗教もない世界のことを　想像してみよう、僕らみんなが　平和な人生を送っている姿を ・・・」と歌います。

上の写真は九条の会・石川ネットが作った「せんそうはすべての『愛』をこわす」。と書かれたポスターです。玄関に張り出して時々読み返しています。

１８４号はアウシュヴィッツ・テレジン見学記と海外見てある記としました。ｐ４に参考にした本を記しました。

購読料をありがとうございます（敬称略）
2014.7.10～7.24

前原満之（宮崎市）　佐々木睦子（横浜市）カンパ含む　秦野公彦（安平町）　堺信幸（小平市）　加藤多一（小樽市）著書「赤い首輪のパロ」
合計7000円は印刷費と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。